

ずいそう

## 次期大統領選出の瞬間を現地で体感して

伊勢木 浩 二



10月に本社を大阪駅近くに移転した。何ヶ月かけて社員一同わっさわっさと準備をすすめ、今は無事に引っ越しも終わり、やっと落ち着いた。お世話になった方々に引っ越しの報告をすると、大半の方が「大変な世の中に大丈夫？」と言って心配してくれる。アメリカのサブプライムローンから始まり、リーマンショック、それに伴って日本でも会社の倒産、廃業を耳にする。

よく昔から「アメリカがくしゃみをすれば日本は風邪をひく」などと言われてきた。しかし、私見だが、今回は風邪をひかないと信じている。今回はアメリカがくしゃみではなく風邪をひき、万病のように世界中に蔓延しつつある。日本はそれをうつされそうになりながらも何とか耐えているように思う。「病は気から」というように今こそ暗くならないようにしなければ、日本の中で不況だとか過剰に騒ぎすぎれば気持ち的に沈んでしまい、不況という世界的な、「はやり病」に日本も侵されると思う。

百聞は一見に如かず、11月初旬にアメリカ経済の拠点ニューヨークへ行ってきた。第44代アメリカ大統領が決定する瞬間をブロードウェイで体感した。その時、本通りの大きな道路いっぱいには白人も黒人も入り乱れ、群衆が大きな道路を埋め尽くし、各州ごとに開票結果が巨大なスクリーンで発表されるたびに大歓声とともに拍手が沸き起こり、見知らぬ人同士が握手をしている。そして、オバマ氏が次期大統領と決まった瞬間もマケイン陣営の人々がオバマ陣営の人に「おめでとう」と握手、ハグをしており、私はこの盛り上がり怒涛のようなヒューマンパワーを感じた。今のブッシュ大統領に不満があったのかどうかは分からないがすごかった。その時、この人たちはなぜ大統領選挙にここまで熱くなれるのか？と真剣に思った。でも後で考えてみれば自分の国のトップが誰になるか？ということに関心がないことの方がおかしいのかもしれない。

日本ではどうかと考えれば、先日、首相が決まった時には国民はこれほど熱くなかったと思う。選挙中もアメリカでは候補者は「このような政策を実行します」、「こんな国を作りたい」といった未来や夢、自分の考えを理解してもらおうとしている。これも日本では首相や与党が考え、政策を語れば野党が反対し、何

をしても言っても反対意見を言うことが主流となっている。これでいいのだろうか？前向きな意見をぶつけ合うのでなければ国もよくなるのではないかな、と思う。

私は政治のプロではないのでこのように単純にしか見れないし、よく解らない。しかし、自分には何の力もないが、日本を思い、日本は平和で豊かなよい国になってほしいと願っている。

日本では周囲の人のことや他人のことまで関心を持つ余裕がないのか、人に親切にする人も少なくなった。しかし、ニューヨークで博物館に行こうと地図を見ながらストリート名が書かれた看板を読んでいたら明らかに70歳を超えた見知らぬおばさんが「May I help you?」と声をかけてくれた。「博物館に行きたい」と言うと、親切に教えてくれた。また、地下鉄で吊り革を持って立っていた時も、私を老人と思ったのか定かではないが、前に座っている40歳くらいの男性が席を譲ってくれた。その際、何か早口でペラペラ言われたが、私には理解できなかつた上に、とっさに遠慮する言葉も出てこない。たぶん次の駅で降りるから席を替わってくれたのだろう、と勝手な解釈をして座らせてもらった。しかし、その人はとうとう私の降りる駅になっても斜め横に立ったままで、時々目が合うと微笑みを送ってきて何とも気まずい思いの十数分間であった。自国の大統領選出に熱くなり、見知らぬ人にも親切になれるアメリカ国民はすごいと思う。

日本にもアジア、ヨーロッパの国々にも、その国の歴史を感じる建物、名所旧跡が多々あり、それらを観光することも楽しみの一つであるが、アメリカにはそれがない。日本でいえば江戸時代から国がはじまったようなものだ。せいぜいジョージ・ワシントンが1789年に初代大統領に就任してからの発展、移民と開拓の歴史くらいだ。

しかし、世界のリーダーと自称するだけの発展した都市と大自然を有する広大な国土に国力のすごさを感じる。先祖が移民者でありその血をひくからかもしれないが、過去を引きずらず、細かいことは気にしないあっさりした国民性、しかし愛国心は強く持っていて、あらゆる人種を受け入れ、目指すところは人種差別のない自由の国ということも素晴らしいことだと思った。